NON NOVEL

NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に〝否定(ノン)〟を発し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説(フィクション)を通して、新しい価値を探っていきたい。小説の〝おもしろさ〟とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく発見されてゆくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい〝おもしろさ〟発見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—26

白き狩人

昭和49年10月25日　初版発行
昭和51年10月5日　16版発行

著者　渡辺淳一(わたなべじゅんいち)

発行者　黒崎勇

発行所　祥伝社(しょうでんしゃ)
〒101　東京都千代田区神田神保町3-6-5
九段尚学ビル
☎03(265)2081

発売　小学館

印刷　堀内印刷　製本　関川製本

万一，落丁・乱丁がありました場合は，お取りかえします。Printed in Japan
© Junichi Watanabe, 1974

長編サスペンス小説

白き狩人（かりうど）

渡辺淳一

NON NOVEL

祥伝社

目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序章 7
第一章 切断 57
第二章 誘惑 87
第三章 錯綜 115

第四章 復讐 143
第五章 疑惑 171
第六章 生死 185
終章 205

表紙カバー……イラスト・山下一徳／構成・坂野豊＋松島正矩

本文イラスト……下高原健二

序章

一

「村形万里子の日記」

四月五日（水曜日）晴れ

今日、新しい勤務表が発表になった。

わたしはB班の二組、病室で言うと、南棟の三〇一号と三〇三号の担当である。三〇一は女性の二人部屋で、三〇三は男性六人の大部屋である。

担任の医師は二番町眉子先生。二番町先生は外科でただ一人の女医である。千葉先生と同期だというのだから、大学を卒え、国家試験を終えて、今年で四年目になるはずである。

わたしと組む先生が二番町先生だときいて、私は咄嗟に、喜びと当惑が入りまじった複雑な気持ちにとらわれた。

二番町先生は美しすぎる。背は一六〇センチぐらい、さほど高くないが、細っそりと痩せぎすで、プロポーションが抜群にいい。

普通、わたしたちは白衣姿の先生しか見ないが、時たま病院の行き帰りに、白衣を脱いだ先生にお逢いすることがあるが、この時の先生の服装は水際だっている。医師という職業らしく、けばけばした派手さはないが、落ちついた色調のなかにセンスの良さが現われている。

わたしはパリに行ったことはないが、センスのいいパリジェンヌは、おそらく、先生のような着こなしをしているのであろう。

女性のわたしが見てもこうだから、男性たちが目を見張るのは無理もない。わたしは病院のすぐ近くの看護婦の寮から通っているので、先生の通勤姿を見かけることはほとんどない。しかし先生のお住まいの荻窪から地下鉄で通ってくるお友達の話によると、車中はもちろん、降りてから病院まで、すれ違う男性たちはきまって、先生のほうに視線を向け、時には立ち止まり、姿が消えるまで見送っている人もいるという。

先生はそのことにお気づきにならないのか、あるいは

気がついていても無視しているのか、ほとんど傍目もなさらず、まっすぐ前を見て歩かれるらしい。男性たちに振向かれたからといって、すぐどうこうなるわけではないが、わたしにはなにか、ひどくもったいないような気がする。

四年前に医学部を卒業されたというのだから、先生は今年二十八歳であろうか、先生ほどの美貌と教養があれば、近づいてくる男性は無数にいると思う。

たとえば同じ科の副医長の井川先生や、同期の千葉先生は、いまでも二番町先生を愛しているという話だし、内科の助教授の飯村先生も、先生がインターンに行った時以来、大変なご執心だという噂がある。

すでに妻子のある飯村先生はともかくとして、千葉先生など、わたしたちから見れば結婚の相手として申し分ない男性に見えるが、先生はお好きではないのか、あるいはまだ結婚する気なぞないのか、それに応える素振りは少しもお見せにならない。

こうした多少、噂のある人たちのほかに、先生を好きな男性は、まだ、数えあげたらきりがないだろう。だが表立って名乗りをあげ、強引にプロポーズする人はなく、ほとんどの男性たちは心の底で、じっと思い込んでいるだけらしい。

だから詰所でも、先生をとり囲んで四、五人のお医者さんが話をしている時の様子をうかがっていると、あの普段は少し気取って、横柄な態度をとる医師たちが、互いの出方を見守り、誰かが抜きんでて二番町先生の好意を受けやしないかと相手を警戒しあい、その実、自分が抜けがけしたいと隙を狙っているといった、一種独特の緊張感がただよっている。

しかし先生は先刻、そうした男たちの心をご存じなのか、あるいはそこが先生の賢いところなのか、誰に特別関心があるという素振りを見せるようなことはなく、皆と万遍なく話し、それぞれに相槌をうたれ、話に聞き入っている。

その意味では、先生は全く得体が知れない。とらえどころがない、というより、隙がないとでも言うべきか、不思議な存在である。

だが、それにしても先生は美しい。それは単に生まれつ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いての美人とか、造化の妙といったものとは違う、ある年月をかけて磨きあげられ、内から滲み出てきた美しさのように思われる。

普通、ただ美しい顔というのは沢山ある。たとえば雑誌のグラビアやテレビに出ている女優さんの顔は、みな美しい。

そうした顔の造りだけから言えば、先生の顔は女優さんとあまり変わらない。もっとも、変わらないとはいっても、女優と同じということは大変なことなのだが……細っそりとした先生の顔は、白いというより、むしろ蒼ざめている。目は山型で、鼻梁は細く鋭く、形のよい唇は笑う時、やさしく崩れる。先生の顔で破調といえばこのやや軽く受け口の唇くらいだが、それがまた男性の心を惹きつけるらしい。

実際、女のわたしでさえ、その唇を見ていると、惹きつけられるような気持ちがするのだから、男性がそんなふうに思うのは無理もない。

しかし先生の美しさは、そうした顔や姿の外見にだけあるのではない。外見はもちろん美しいのだが、そのほかになにかがある。

今日、わたしは先生と一緒に回診をしながら、つくづく先生の顔を見ていて、そのなにかが、おぼろげながらわかったように思った。

それは……わたしはうまく言い表わせないが、少し気取って言えば、「アンニュイ」とでも言うべきものかもしれない。

「アンニュイ」はフランス語だが、日本語でいえば、「倦怠」という意味にでもなるのであろうか。しかし日本語の「倦怠」という言葉は字面のせいか、あるいは発音のせいか、そのものずばりの、倦いて怠ける、という意味から、怠慢とか怠惰という意味を連想してしまう。

だが先生の表情には、そんなふしだらな連想を誘う言葉は似合わない。

日本語で強いて言えば「気だるげ」とでも言うべきかもしれないが、それだけでは、いま一つぴんとこない。「気だるげ」のもう少し高級な言葉が欲しい。

結局あれこれ考えた末、思い出されるのはやはり「アンニュイ」である。たしかにこれ以外に適当な言葉があ

るとは思えない。
先生の「アンニュイ」には、知性から滲みでてきた「虚しさ」といったものが潜んでいる。
ただ美しい女が自堕落になって「アンニュイ」になった、たとえば娼婦のそれのようなのとは違う。理性の裏付けのある「アンニュイ」である。
医師として、一応教養のある男性たちが、呆けたような憧れの眼差しで、あの先生を見詰めるのは、目鼻立ちの美しさだけでなく、そうした、どこか虚ろな雰囲気が男心を唆るからなのかもしれない。
でもあの先生の美しさのなかには、底知れぬ無気味なものが潜んでいるような気がしてならない。美しさに惹かれたつもりで入っていくと、いつか取り返しのつかない深い洞に突き落とされるような怖さがある。あの先生の、微かに笑ったあとで視線を戻す、その一瞬の眼差しには、背から剃刀でもつきつけられるような、冷やりとした鋭さがある。
一体、男の人たちはあの美しさのなかに潜む無気味さに気づいているのであろうか。それを知らずに、ただ美しさに酔って近づこうとしているのだろうか。
いや、もしかすると、こんなことはわたしの取りこし苦労なのかもしれない。
男性たちはみなそのことを知っているのかもしれない。もちろん男の人によっては、それを意識している人と、意識していない人がいるかもしれないが、彼らが二番町先生に魅かれるのは、美しさの底にそうした無気味さが、漂っているからではないだろうか。
いや、わたしは実につまらないことを考えたものだ。先生をとりまく男性たちが、どんなことを考えたところで、私には関係ないことである。それなのに相手の男性のことをあれこれ考えるなんて、わたしはよほどお目出たいか閑人である。もうこんなことを考えるのは止そう。
それにしても、あの先生が外科を専攻したのは、どういうわけだろう。
医師という職業を選んだことも不思議だが、たとえば内科とか小児科、眼科というように、女性らしい科があったろうに、なにを好んで、殺風景な外科などに来たの

だろう。
それも骨太の男勝りの体格とでもいうのならともかく、あんな華奢な先生が、事実、病院外で初対面の人に名刺を差し出したら、
「あなたが外科ですか」と言って、ほとんどの人がきき返す、と先生は笑っておられた。
わたしだって、同じ病院に勤めていなかったら、たとえ白衣を着ていたところで先生を外科医などとは思わない。
せいぜい聡明な教授秘書か、検査技師とでも錯覚するのが関の山である。
前に先生と組んでいた麻子が、「先生はなぜ外科のお医者さんになったのですか」ときくと、先生はただ「わからないわ」とだけ言って笑われたそうだ。
わたしは今日、回診のあと、廊下を並んで歩きながら、それと同じことをきいてみた。麻子がきいた時から一年近くたっているのだから、別の返事をするだろうと期待していたのである。
だが答えは同じだった。
「わからないわ」と先生はまるで他人事のように、歩きながら答えられた。
それを聞いた時、わたしは簡単に納得してしまった。理由はそれでいいのだし、それがいかにも正直な答えのように思えた。
しかし考えてみると、この答えはやはりおかしい。
国家試験に合格した一人前の医師が、自分の専攻科を決めた理由を「わからないわ」の一言で片付けていいものだろうか。
たいていの先生方は、その科が気に入ったとか、主任教授の人柄に惚れたとか、親しい先輩がいたから、外科の男性的なところが気に入ったから、など積極的、消極的にいろいろだろうが、とにかく何等かの理由があるはずと思う。
それなのに、あの先生はいとも簡単に「わからないわ」と答えられた。
あれはわたしを馬鹿にして言ったのだろうか。麻子もわたしも、看護婦だと見て軽く言ったのだろうか。
でも、あの先生が、看護婦だからといって軽く見るわ

けはない。少し考え、それからずばっと言った。答えがなんであれ、一瞬考えたことに間違いはない。

やはりあの先生が外科を選んだのは「わからない」という理由が正しいのかもしれない。もしかして人間が自分に正直にきき返したら、答えはみんなそんなふうになるのかもしれない。

こう考えてくると、あの先生にはわからないことがいくつかある。

あれだけ美しいのにいっこうに結婚しようとなさらないこと、どんなすてきな男性が近づいても、ほとんど見向きもしないこと、それからときどき、はっとするほど厳しい眼差しでわたしたちを見詰めることなど、数え上げたらきりがない。

でもわたしはあの先生と同じ病室の担当になれてとても嬉しい。いままでも同じ科にいたのだから時たま話すことはあったが、それは当直とか、担任の看護婦の依頼の伝言を伝えるといった程度で、二人だけになって話したことはなかった。

今度からそれを自由にできる。実際、同じ病室を受け持つ、医師と看護婦なのだから、密接に連絡をとらなければならない。これは当然の務めである。

でもそうした仕事のことだけでなく、それ以外のことでもあの先生と親しくなれそうだということはとても嬉しい。あの先生と話をして、いろいろなことを教えてもらいたい。愛や結婚のこと、そして先生はそういうことについてどのように考えているのかも知りたい。

いままで遠くから眺めていただけの先生が、わたしの身近にきてくれた。

あの少し威張りすぎる井川先生や、剽軽な千葉先生が憧れている二番町先生と、わたしは自由自在に話をすることができる。仕事の上ではともかく、それ以外のことでは甘えることだってできる。

男の先生たちは、そんなわたしを見て羨ましがるに違いない。

そうだ、先生を独占しちまおう。

そして男性の熱っぽい眼差しから守ってあげよう。

わたしの許可をえなければ、誰もあの先生と話をできないようにしてやりたい。そうすれば威張った先生も、

偉い先生も、みんなわたしのところに膝まづいてくる。
待て、わたしはなんと馬鹿なことを考えるのだろう。少し空想をしだすと、それがとめどもなく拡がり、とらえどころのないところまで飛んでいくところが、わたしのいけないところだ。
どうなったところで先生は先生で、わたしはわたしなのだ。先生をお守りしても、わたしはなんの得にもならないのだ。
それにしてもわたしが二番町先生の病室の係と知って、初めに感じた戸惑いはなんだろう。
そうだと知った時、わたしは正直、嬉しかった。それに嘘はない。だがすぐ次の瞬間、わたしは困ったような、少し気の重い感じにとらわれた。
わたしは一度でいいから先生の下で働いてみたいと考えていた。それが思いがけなく実現したのである。わたしは心では願っていたが、婦長さんに頼んだことはないから、これは婦長さんが偶然そうしたまでのことである。
それなのにわたしは何故、戸惑いを感じたのか。
あの先生が美しすぎるからだろうか、しかし、そんなことは初めからわかっていたことである。
男の先生たちがみんな狙っているからか、でもそれもいま知ったことではない。
女だからか、だが、それもわかっていたことである。
結局……「わからない」
これは先生が外科を専攻ときめた理由と同じである。おかしな一致があるものだ。
とにかくわたしは嬉しさと同時に、先生と近づきになれることに、一瞬なにか怖いような、いやあな予感にとらわれた。それは具体的になにに対して、どうというようにはっきり言い表わすことはできない。でもたしかに、瞬間、気が滅入るような感じがわたしの体のなかをとおり抜けていった。
しかしそれはそれでいい。「わからない」ことはいくら考えても同じである。
わたしはあの先生をもっと知りたい。いまはそれだけが願いである。

二

「二番町眉子の日記」

四月五日（水）曇り

午前八時より、医局にて恒例のカンファレンスあり、三〇二号、西村杏子、提出。

外来診断名、右乳房腺維腫。

討論の結果、型のごとく右乳房の試験穿刺、組織片鏡検の結果、外来診断のとおり腺維腫であれば腫瘍のみ摘出。もし悪性（癌腫）の疑いあれば、右乳房全摘出と決まる。

私見では癌の疑い濃し。

また一人、そして一つの乳房……。

カンファレンス後、そのことを本人に告げると美貌を歪ませて泣く。

夫に告げておくように言い残して部屋を出る。

午後、昨夜急患で運びこまれた腎臓破裂の患者の容態悪化、井川医師執刀で、再開腹するも、夕方四時、手術場で死亡。

この間、出血著しく下着まで赤く染まる。

終了後、手術場の女性用浴室にてシャワーを浴びる。

幸いロッカーに替りのスリップ一枚あり、ブラジャーはなく、仕方なく血痕を拭い、一時的に使う。

それにしても、ブラジャーまで血に染まるとは思わなかった。

夜、井川医師から食事を誘われるが、疲れているからとの理由で断わる。

帰宅、すぐバスルームへ。血を浴びた下着はそのまま捨てる。

今日から看護婦の配置転換あり、担当が村形万里子、森美代、寺田照子の三名に変わる。

村形万里子は二十三歳、昨年大学附属の高看養成所を出たばかりの若さ。

一緒に回診しながら、「なぜ医者になったか」「なぜ外科を専攻したか」としきりにきく。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com